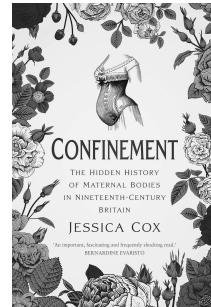


書評

Jessica Cox, *Confinement: The Hidden History of Maternal Bodies in Nineteenth-Century Britain*.

(The History Press, 2023)

西村 美保（名古屋学院大学）



本書は、19世紀イギリスにおける女性の様々な体験—妊娠から出産、そして出産後の生活まで—を実例をもとに吟味しているものである。それに望まぬ妊娠や中絶、死産、出産後の精神と身体、育児のことなどが含まれていて、ヴィクトリア時代の状況が詳しく提示される。そして、現代の状況との比較考察、さらには関連テーマの文学作品への言及がなされる。読者は、それぞれの時代の女性を取り巻く環境については勿論のこと、女性の突然死が残された者に与える影響についても深く考えさせられるだろう。ここでは紙面の関係上、特に出産による死を扱った第4章“A Dangerous Business: Maternal Mortality”を中心に、本書を紹介したい。

序論の冒頭で詳述されているように、本書の執筆は2016年の著者の出産経験が契機になった。予定日を10日過ぎ、破水して、一時お腹の子供が危機的状況に陥った。緊急帝王切開で無事生まれたが、医師の判断で輸血はされず、翌日には強い痛み止めと回復を助ける薬を出され退院させられたという。この経験から、著者は、もっと医療が制限されていた時代に女性がどんな困難を経験したか考察するようになった。「すぐに明らかになつたのは、我々のどちらかは—ひょっとすると二人とも—19世紀であれば、出産を乗り越えて生存するということはなかつただろうということだ。私の娘の命を救つた手術はヴィクトリア朝英國ではめつたに行われなかつた・・・。」¹ (11-12)

第4章では、まさにこのヴィクトリア時代の事例を吟味している。一つは、1817年のシャーロット王女(Princess Charlott)の出産である。夫妻は自宅で第一子の誕生を楽しみにしたのだが、予定日を2週間以上過ぎた11

月上旬になって、急遽生まれる兆候が確認された。ところが、そこからが大変な難産で、50時間ほどかかった。立ち会った医者リチャード・クロフト卿 (Sir Richard Croft) は、赤ん坊が危険な状態にあったにもかかわらず、鉗子の使用を拒み、自然分娩させるようにした。帝王切開は、母体に及ぶ高い危険性のために考えられなかった。クロフトのこうした判断は後に多くの議論を呼び、2, 3か月後に自殺したらしいのだが、それを駆りたてる要因になったと述べられている。

本書では様々な階級の女性の事例を紹介しているので、王族の出産の次には労働者階級の女性の実例も取り上げられている。著者はヴィクトリア時代の女性がいかに困難な経験を強いられていたかということの一つに、「不幸な妊娠が分かった女性にとって選択肢がほとんどなかったこと」(13)を挙げているが、まさにこのケースはそのような類のものと思われる。1888年12月、チェシャーのストックポートで、かなりお腹の大きい若い未婚女性がある店で倒れているのが発見された。Sarah Isabella Pitcher という22歳の、マンチェスター出身の塗料メーカーの娘だった。以前は家事使用人として働いていたが、妊娠が分かり、地位を手放すことを強いられた。妊娠に至った正確な状況は分からぬ。救貧院で死ぬことを避けようとしたのかもしれないが、結局は、その店で発見された後、ストックポートの救貧院に連れていかれ、そこで、70年前のシャーロット王女のように、死産となった。そして出産後まもなく、サラはひきつけの発作を起こし、亡くなり、1888年12月15日にマンチェスターの南墓地で埋葬された。当時の救貧院の状況も次のように伝えられている。

救貧院の状況はこの当時特に厳しかった。すなわち、数年後、1894年のことであるが、委員会は、女性たちの部屋が「危険なほど混んでいる」と、「患者たちは看護や病院での処置を要求していたが、看護士たちには手が回らなかったこと」などを見て取っている。女性がいる棟のいくつかの部屋は「納屋と変わらない」と表現された。(108)

著者は、現代と比較して、出産中の合併症が原因の二人の女性の死の要因は、今日なら防げたり、治療できるものだが、19世紀において出産は危

険を伴う事業で、いかなる階級の女性でも死に至る可能性はあったと述べる。ただし、ここで興味深いのは、にもかかわらず、彼女たちは比較的不運だったという結論を出していることだ。その根拠として提示されるのが具体的な数字である。

この当時英國における妊婦の死亡率は1000分の5だった。あるいは0.5パーセントで、環境や状況によっては変動があったものの、比較的安定していたのだ。これは、今日の出産10万件につき約7人、つまり0.007%の死亡率に比べると不利だが、それでも19世紀のイギリスでは、ほとんどの女性が出産を生き延びることが期待できた。にもかかわらず、シャーロット王女とサラ・ピッチャーの死は氷山の一角で、この時代には、表面化されていないところで、妊娠や出産が直接の原因となって死亡し、その死がほとんど忘れられている何千人の女性がいるのである。(109)

こうして、数字を示しながらも、著者は「とりわけ1837年の市民の登録制度の導入以前は死因は必ずしも正確に記録されていなかったので、女性の死亡の正確な数は推測が難しい」(109)と述べる。また、1837年より後でさえ、死亡診断書に書かれた死因には必ずしもいつも女性の妊娠の有無や、最近の出産の有無が記されていなかった可能性があった。また、非合法の中絶の結果亡くなった場合には、死因はわざとぼやかされる可能性も示唆されている。それでも、1877年の*Annual Report of the Registrar-General*が1847年から1876年までの30年で10万人以上の女性たちがイングランドで出産で亡くなったと示唆していることに言及し、19世紀全体では無数の女性たちが命を落としたことを著者は指摘する。多くの女性が極度の痛みの中で死亡し、医者は出血を防ぐことも、感染の拡大を抑えることも、ほとんどできず、実際、衛生行為の理解が欠如していて、医者が感染を広げた責任がある場合もあった。

こうして、本書が素晴らしいのは、様々な状況に関する背景的知識を提供しつつ、数値が示す以上の個々の人間の苦しみへと読者の想像をいざなうことだ。「統計の背後にはたくさんの人間の悲劇があった。苦しみ、悲

しみ、急に終わらされた命、そして、母親との絆が途切れたことなど。こうした数字が19世紀英國において母親になろうとして亡くなった多くの女性の物語を表しているのだ。」(109-110) さらには、フィクションの中の救貧院での出産と女性の死については、ディケンズの *Oliver Twist*² に言及し、改めてオリヴィアの母親の事例が多くの19世紀の母親の体験を反映していることを強調し、その死の影響—子供を孤児にし、残された者に測り知れない喪失感を与えるなどの一についても考察させる。

シャーロット王女の死が国家的悲劇として受け止められた件については、「180年後のもう一人のプリンセス・オブ・ウェールズの死」の後の国民の反応を引き合いに出し(110)、それに匹敵するものであったと伝える。国民はシャーロット王女の新しい子供の誕生を期待していただけに、また王女を敬愛していただけに喪失感は深いものだった。死因は違っても、どちらも突然死であり、察するに余りあるほど痛ましい死に方であった。また、おそらく最後に目にしたときがあまりにも美しくにこやかで、亡くなるにはまだ若く、信じがたいことがあるのだろう。

私自身は、*Oliver Twist*に加えて、本書を読みながら、他の3人の作家の作品における女性の死を思い起こしていた。一つはダイナ・マロック・クレイクの *Mistress and Maid*³ のセリーナの死である。リーフ姉妹の次女のセリーナは誰からでも愛されるようなタイプではなく、気難しくて口うるさい女性であるが、それでも出産による突然の死は家族や使用人に衝撃を与える。経済的困窮から妥協した結婚ではあったが、裕福な商人との生活は読者を安堵させるものであり、まさか、そのような悲劇が起こるとは思わないからである。二つ目がハーディの *Far from the Madding Crowd*⁴ のファニーの死であり、やはり救貧院にたどり着くとすぐに倒れ込み、その後死の知らせが彼女の元の雇い主バスシバにもたらされる。また、出産後しばらくしてからでも突然亡くなるケースがあったのを思い出した。それはギャスケルの“A Dark Night’s Work”⁵ の第二章においてであり、ヒロイン、エレノアがまだ6歳の時のことで、赤ん坊の妹もいたのだが、若い母親レティスがある日突然亡くなったのである。詳しい死因は書かれていながら、残された者たちの悲しみと衝撃が強烈なインパクトで描かれている。

シャーロット王女に戻るが、彼女の家族にとって悲しみは測り知れない

もので、特に夫は40年たっても、彼女の死の衝撃が和らぐことはなかった。そして、彼らの悲しみは「19世紀イギリスの他の何千と言う家族の悲しみを反映している」(111)ことを著者は述べる。出産で亡くなったある女性の家族の証言—「母の嘆きに心がはりさけんばかりで、人生が突然止まってしまったようだった」(111)—を紹介し、「この『言葉にできない悲しみ』がその世紀にわたって、何百万という人々に影響を与えた」(111)ことを著者は強調する。このように記録にある事例を紹介しつつ、それを通じて読者を背後に隠れた数えきれないほど多くの人々の悲劇へと想像をめぐらせるよう誘う。出産による死を含め、突然死について考えさせられるのは、幸福と悲劇とがこんなにも表裏一体のものであり、一瞬のうちに変わるものであること、それでいて悲劇がその後及ぼす時間の長さはいかに残酷なものかということだ。

死を悼むことやそれを示すことについての認識や慣習は、ヴィクトリア時代と現代では、確かにかなりの違いがある。身内が亡くなつて黒い服をどれだけの期間着ることだろう。また、喪に服していることを示してウェディングドレスの色を変える人がどれだけいるだろうか。しかし、実際には時代や慣習が変わっても、精神的な衝撃に変わりはないことを本書は改めて思い起こさせてくれる。本書を読むことで、ヴィクトリア時代の女性の苦労に対する理解が深まると同時に、文学作品に対する視点の広がりが期待できることだろう。

註

- 1 本稿におけるJessica Cox, *Confinement: The Hidden History of Maternal Bodies in Nineteenth-Century Britain*からの引用の和訳は筆者によるものである。
- 2 1837-39年、『ペントリーズ・ミセラニ』誌に掲載、1838年、単行本として出版された。
- 3 1862年、『グッドワーズ』誌に分載され、1863年単行本として出版された。
- 4 1874年に『コーンヒル』誌に発表され、同年単行本として出版された。
- 5 1863年に『オール・ザ・イヤー・ラウンド』誌と、アメリカの『ハーパーズ・ウェイクリー』に分載された。